

風景の講義

文学部

山口真美 助教授

Yamaguchi Masami

「基礎演習I」 [水曜日4限/心理学コース1年]

新聞で初めて知った。「新・赤ちゃん学——私の研究室から」という連載である（産経新聞/昨年末から10回掲載）。末尾に（中央大学文学部助教授）とあるのを見て、「こんなおもしろい研究をしている先生が身近に」とうれしくなった。

折しも台風23号

10月20日——ドキドキしながらの取材日。それが、ふいにダメになった。よりによって台風23号が関東直

撃、臨時休講。それもよりによって直前の「4限から」。緊張の糸が切れたような、この心理の乱高下を心理学はどういうのだろう。

そういうわけで、翌週——。

50人ほどが入る3号館3260教室は、ほぼ満席。文学部には珍しく、男女比は1対1に近い。

少しざわついた教室に、山口助教授が急ぎ足で入ってきた。さっそうと、という雰囲気がある。黒い淵メ

「高校までの心理学は忘れなさい」

赤ちゃん学先生の硬・軟・華

ガネに、パンツスタイル。

さっとプリントを配る。驚くべきは量の多さだ。学生のレジュメ、ディスプレイスクション資料……中には英文のテキストも。15枚ものプリント整理にあたふたして、周りと確認し合っているはずかざず、

「そこ、質問？ 足りなかったら自分で取りに来なさい」

思わず姿勢を正した。教室の空気がシャキッと引き締まる。すると、

「先週の続きから、発表よろしくね」

急に柔らかな口調に変わった。

相貌失認、純粹失読：

学生が5、6人ほど前へ出て、自分たちで作ったレジュメを説明する。タイトルは「相貌失認と失読症」。内容面の概説は前回だったらしく、残りの補足的な発表で終わった。顔は見えるが誰の顔かは認識できない

いかないとね」
「テレビの心理テスト、アレ大好き」みたいな夢見るココロをうち砕く、ハードな講義である。
やまぐち・まさみ 中央大学卒。
お茶の水女子大大学院博士後期課程単位取得退学。専攻・実験心理学。98年から現職。著書に『赤ちゃんは顔を読む』、共著『ヒトおよびニホンザル乳児における母親顔の認識の発達』など。国際的にも数々の論文を発表して活躍。

「相貌失認」、脳生理学からみた損傷部位の「病巣局在」、書くことのできるが読めない「純粹失読」……事例は興味深く、でも専門用語はなかなか難しい。

「これから先、みなさんは好きなテーマで発表していくことになりませんが、テキストはロジカルに読みましょう。高校までの夢を背負った『心理学』から脱して、どういう心理学が必要とされているのかを理解して

はじめ赤ちゃん学の講義を聞いたかったのだが、前期で終わっていた。これは後期からの講座である。〈認知・知覚〉の心身メカニズム。赤ちゃん学とも連続しているようだ。
「現代のエスプリ」（449号）掲載の座談会「現実への関わりから再生する心理学」の資料を読む。シンとした教室内で、資料を音読しているのが聞こえた。声のする方を目をやる、一番前の席に、河野泰弘さんと付き添いの男性がいた。全盲の河野さんは、付き添いの人の協力



を得ながら、授業に参加している。その間に山口助教は、ディスカッションのポイントを板書する。

・全盲と清眼者の違い……新しくわかったこと。重要だと思ふこと

・住みやすい環境はどうしたら作りだせるか？ ……自分が困った経験。それぞれの感覚世界に対する質問・疑問。

「あとで話し合うんだから、ポイントには線くらい引かないと」

あ、そうかとペンを取る。高校までの受身の姿勢ではないけない、あく

まで主体的に。1年生の教室はまだしゃんとした。

「空間を音で判断」全盲の河野さん

ディスカッションが始まると、積極的に意見が飛ぶ。4、5人のグループごとに、先生が声をかける。

残り15分となったあたりで意見発表に移った。

「全盲の人は、どうやって空間を把握しているのか？」

意見の多くは、河野さんの体験談を求めるものだった。

「空間は、音で判断しています。耳が敏感で、たとえばドアを開けると、音の広がりでその部屋の広さや高さがわかります」

ひとつひとつ、言葉を選びながら丁寧に答える。学生も先生も、真剣に河野さんの話に聞き入る。新たな

発見のたびに、大きくうなずく人が多かった。

「清眼者は、真つ暗なところにいると、怖くて歩くことすらできませんよね」

と先生が発言すると、

「私の場合、誰かいるな、と河野さん。中国からの留学生・王劍^{ケンダイ}姉さんも留学生ならではの体験談を披露した。

「電車に乗っているとき、駅名が放送されても、反応できませんでした。欧米からの留学生の友人は、音が聞けても、駅名の案内に漢字・ひらがな・ローマ字で書かれていて、座にわからないことがある、と言っていました」

最後に、先生はこうまとめた。

「私たちは、ひとりひとり違う世界をイメージして、リスペクトすること。これをマスターしないと単なるおせっかいに終わっちゃう。これから、心理学をもっと勉強していくうえでも、大切なことです」

「他の人の持つ世界にイメージネーションを広げよう」



——チャイムが鳴った。

「この日先生が繰り返していた言葉が、授業の後も頭に残っていた。私たちは、ひとりひとり違う世界を持っている。自分の「ものさし」との違いを、むしろ楽しみながら認め合う「やわらかい接触」が、そこから始まる……そんなことを考えた。

(学生記者 津江瞳 II 文学部 2年)